



UP選書

経済学五十年 下

大内兵衛



東京大学出版会

経済学五十年 下

大内兵衛



東京大学出版会

著者略歴

1888年 兵庫県に生る
1913年 東大法科大学経済学科卒業
日本学士院会員，東京大学名誉教授
経済学博士

主要著書

「アダム・スミス国富論」「ベッティー政治算術」
「財政学大綱」「経済学」「旧師旧友」「人物・風物
書物」「我・人・本」「日本の曲がり角」「大内兵
衛著作集(全10巻)」

現住所

鎌倉市稲村ヶ崎 3-11-14



経済学五十年 下

UP選書56

1970年8月25日 発行

1975年6月25日 第3刷



◎著者 おお大 うち内 ひよう兵衛

発行者 加藤一郎

発行所 財団法人 東京大学出版会

113 東京都文京区本郷 東大構内 電話 (811) 8814 振替東京 59964

精興社印刷・新栄社製本

1333-05567-5149

下 卷 目 次

第七章 嵐の中の経済学・・・・・・・・・・・・・・・・三九三

肅学後の東大(二五五) 大河内理論の魅力(二六六) 舞出経済学の標高(二六〇)

大塚史学の功績(二九六) 難波田君の『国家と経済』(三〇〇) 風雪で鍛え

た知性(三〇一) 戦争中の花形(三〇四) 中山、東畑の全集(三〇六) 貧弱だっ

た戦争経済学(三〇八) 戦時中の大原研究所(三二六) 疾風の野の石かげ

(三三三) スミス『国富論』の翻訳(三三四) 鮎川義介氏の大原援助(三三七)

渋沢氏の勸めで日銀に入る(三三七) 終戦の詔勅(三三九) うやむやに終っ

た金融改革(三四〇)

第八章 解放と再建の初期・・・・・・・・・・・・・・・・三七七

平和への胎動(三七七) 日本統計研究所(三八〇) 蛮勇演説(三七七) 終戦当初

の経済政策論(三八四) 落第大蔵大臣(三八四) 高野先生とNHK(三八七) 民

主戦線統一運動(三八七)

第九章 東大に復歸して……………三九

無罪と大学追放(四七) 大学復歸(五七) 経済学部再建(五七) 東大の
バージ(六〇) 社会科学研究所の新設(六二) 東大制度の諸改革(六五)
経済学部の改革(六五) 戦後の講義(七〇) 天皇と経済学(七五) 戦後の
著述活動(八〇) 『資本論の研究』(八二) 『日本資本主義の研究』(八四)
マルクスの翻訳(八七) 経済学部三十周年(九二) 停年(九四)

第十章 学問と實際の境……………一〇一

三つの自戒(四二) 統計制度の改革(四三) 社会保障制度の整備(四七)
日本のビバリッジ案(五〇) 老齡年金制度の成立(五三) 小さい子だが、
大きく育てたい(五五) ヒモつき論の展覧会(五七) 大学教授と政府顧
問(五九) 『はだか隨筆』への危険(六三) 日本でなぜマルクス学が盛
んか(六四) 法政大学総長となつて(六六) 私学経営のむつかしさ(六八)
うらやましい官学の財政(七〇) 教育改善には長年月がいる(七二) 民
主化をはばむ三大学閥(七五) 中小企業のもつ意義(七九)

第十一章 百花齊放の現代経済学……………一〇三

世界のマルクス経済学の潮流(四四) ソ連の官僚マルクス主義(四八)

第十二章

中国の實踐マルクス経済学(四四七) イギリスの保守的マルクス主義
 (四四七) プラグマチック・マルクシズム(四四七) 無教会主義マルクシズ
 ム(四四七) 進歩した日本の「マルクス経済学」(四四七) 日本資本主義論
 の新展開(四四七) 講座派と労働派の論争はどうなったか(四四七) マルク
 ス主義経済学は有効か(四四七) ケインズの経済学(四四七) 近代経済学の
 国民所得論と財政論(四四七) 日本の近代経済学(四四七) ミソクソ合計の
 『経済白書』(四四七) 中山伊知郎君の経済学(四四七)

経済学の楽しみ・・・・・・・・・・・・・・・・四七九

経済学者の運命(四七九) 三つのタイプがある(四八〇) 近代経済学者は幸
 福か(四八〇) 官庁経済学(四八〇) マルクス経済学か近代経済学か(四八〇)
 マルクスでメシが食えるか(四八〇) 学生時代の武者修業(四八〇) 経済学
 の平和共存(四八〇) お互に敵を知れ(四八〇) 曲り角にきた日本のマル経
 (四八九) ボーイズ・ビー・アンビシアス(四九〇)

第七章 嵐の中の経済学

肅学後の東大

——戦争中の日本の経済学というのはどういう性格でしたか。先生はそれをどう見ておられましたか。

先日話した通り、ぼくは、平賀肅学の後の東大についてはほとんど知らない。まして天下の経済学については見聞がない。何しろぼくは刑務所から出て来てから終戦のすぐ前まで、すなわち七年間、世の中と全然無関係に暮した。東大からは追われ、ジャーナリズムからは嫌われ、収入の道は絶たれた。訪ねてくる人もなく訪ねる人もない。ウカウカこちらから訪ねたりすると、その訪ねられた人が迷惑する。国賊の訪問を受けては誰でも困る。それでも、誰もがしたように、ぼくも、野菜やさつまいもを買出しにリュックを背負って田舎へでかけたよ。そして行きつけの農家を一軒作った。ところが、そのうちにぼくが国賊であることがばれて大変困ったことがある。そういう条件のもとで、ぼくは河上先生にあやかっただけで当然に閉戸閑人となり、純粹の読書人となった。ただ、高野先生、森戸、久留間その他大原研究所の人々はぼくを許してくれて、ぼくをその研究のメンバーに加えてくれた。ぼくが家の門を出るのはここへ行くためであった。ぼくは、

この柏木の静かな美しい庭をもった日本家の中で、また静かに読書した。だから、戦時中の世の中、嵐の中の経済学のこととは知らないよ。

——それでも、そういう書齋を通じて戦争中の学界をどう見ておられたか、まず平賀肅学後の東大の経済学部からおうかがいしましょうか。

そう問われると全く無関心であったとはいえない。数日前、舞出君に会って平賀肅学のことを聞いたとき、舞出君は、平沢（道雄）君のことで平賀さんに大へんしかられたという話をした。それはこういう話だ。舞出君が当時ぼくに、いい助手の候補者はないかと聞いた。ぼくはそれに対して平沢君をすいせんして、平沢君が採用された。ところが間もなく平沢君が警察につかまった。そして何日か拘留された。それは何年か前の滝川事件のとき平沢君がその反対運動に加わっていたためらしかった。この拘留通知が警察から大学に来了。平賀さんが怒ったのはこのため、平賀さんは舞出君を呼んで、いやしくも肅学の際そういう反国家思想の人物を助手にすいせんするなどはけしからぬことだといって、頭から湯氣を立ててしまったというのである。

当時この話はボンヤリ聞いていたが、こんどはじめてはっきり聞いて、そんなことがあったのか、ぼくも罪なことをしたものだと思った。そして平賀肅学をああいふうに不徹底あるいは貧弱なものにした罪の一端がぼくにもあったことを知って首をちぢめた。もともと平沢君はたぐいまれな秀才でもあり英才でもあった。助手としてはずかしい人ではなかった。今日生きていたら

立派な学者になっていたにちがいないが、それにしても、ぼくは平賀さんにも舞出君にもすまぬことをした。平沢君は肅学の犠牲となって退けられ、のち兵隊にとられてフィリピンの山に草を食いつつ死んでしまった。

こういうような次第で、東大が平賀肅学によって迎えて来たものは多数のエトランジェであった。北岡寿逸、中川友長、増地庸治郎、中山伊知郎、東畑精一、永田清、松本信次、永雄策郎の諸君これである。これらの人々のうちには東大経済学部で育った人は一人もいない。学籍上みなエトランジェである。すなわち東大は平賀肅学により、二十世紀のはじめのシナ同様、日本学界の植民地と化してしまったのである。これら外来のせき、学の学問と思想とについて品評することは、いまは御遠慮申しておくが、かりにこの人々の全部がもれなくほんとうのせき、学であったとしても、この植民地大学化を以て東大経済学部の伝統の強さ、高さを、証明することはむづかしい。いな、東大の權威はこのときほぼ地に墜ちたといっている。

それにもかかわらず、ぼくは東大のうちに学問の伝統と自由への努力をさがし求め、それを以て建学以来の余光としたい。そうしなくてはぼくの心は慰まない。

そういう意味で、ぼくは戦時中の東大経済学部に残っていた灰をほじくって四つの自由の学統の形見を拾い出した。この四つは、戦争が東大の顔をかきむしった爪のあとだともいえるであろう。

——その四つとは……。

その第一は大河内一男君の社会政策論の形成、その第二は舞出長五郎君の理論経済学の完成、その三は大塚久雄君の経済史学方法論の確立、その四は難波田春夫君の『国家と経済』これである。

この外に東大経済学部歴史と伝統との流れとして、東北大学における安井琢磨君のシュンペーターを基礎とする新しい経済学、また一高に去った木村健康君のケンブリッジ・スクールに立つ厚生経済学の系統化が進みつつあったが、これはむしろせき出された支流に咲いた花である。

大河内理論の魅力

——それでは大河内さんの社会政策学を先生はどう思っておられましたか。

あの学説（『社会政策の基本問題』）はもちろん日本社会政策学の新理論であった。風早八十二君の『日本社会政策史』と相照応して、すでにファッショ体制にうつっていた日本政府に対する一種の改良政策の勧めであった。

あれは君たちも知る通り、社会政策は生産政策であるという命題に要約することができるかと思ふ、そしてそのことをマルクスの経済学から説くかのごとく見えるものである。これがもし、分配において賃金を上げることが直ちに生産における利潤を上げることであるというのであれば、

そういうマルクスはないことは明瞭であるが、そのところの二者の関係はなかなか微妙に説かれているところにこの学説のミソがある。当時の条件の下ではこの学説は進歩的な面をもっていた。そこで、この学説に対して北岡寿逸君がかみついた。そのかみつき方が日本犬のようであったのがなかなか面白かった。この人は社会政策は資本主義の政策であるから社会主義でない。社会主義から社会政策などというものは出て来ない。大河内君が社会主義から社会政策を生み出すとするのはまちがいであるといった。これは、鶏は卵を生む。アヒルも卵を生む。しかしアヒルの生んだ卵は鶏の卵でない。故にアヒルの卵は卵でないというのに似ていた。この論戦が勇壮活潑であったのは、北岡君は金井延先生の社会政策の講義を聴いた弟子である。そこで先生と同じぐらいな権威をもって、東大の社会政策学講座を担当しようという志をもっているという意であったかも知れない。それに対して大河内君もさるもの、マルクス主義に倫理の冠をかぶせた。戦争の舞台においてのカムフラージュはそういうことになる。同様のカムフラージュは、大河内君の『スミスとリスト』についてもほどこされている。ここでも唯物史観は道徳また国家主義のピニール（この時代にまだそういうものがなかったのに）に包まれて戦乱の舞台の上で、お節句のお内裏びなのように坐っていた。

東大ではなく一橋の話だがその高島善哉君の内裏びなスミス論（『経済社会学の根本問題』）も名作で、大河内びなとならんで仲よく学壇に坐った。この方のピニールは社会学製であった。両方

とも正しい意味でのマルクス派の作品ではない。しかし名工苦心の作であった。

舞出経済学の標高

——舞出先生の『理論経済学概要』を批評して下さい。

舞出君はぼくの旧友であり、ぼくの学問の先生である。その人に対して礼を失することはいいにくい。それはとにかく、あの本は、日本経済学の標高を示す三角塔である。第一に、歴史派経済学とちがい、ともかくも価値論がある。第二に生産論と分配論との連絡がある。第三に全体としての体系がある。そういう点でマルクス学の産物であり、古典学派の正統をついでいる。

しかし、価値論において、マルクス説に対して重大な修正を大胆に試みている。しかもそれは利潤の源泉という場でなされている。すなわちここでは経営資本家の才能に特別のコンプリメントが捧げられ、これによって労働価値説は否定されている。そしてそれによってせっかくの体系がややぼやけたものとなっている。すべてこういうことは例えばロビンソン女史やストレイチーに見るように、今日イギリス経済学の特徴であるが、舞出君の方がもちろん先輩で、その源流はシュンペーターであろう。シュンペーターが日本で特異の地位をもつというぼくの論の一つの証拠である。はなはだ失礼だが、ぼくは舞出君のこの本にはこういう欠点があると思うが、それにしても、この本をぼくの青年時代の経済学教科書、津村、福田、山崎諸先生のそれに比べれば、

その差数歩のみではない。ぼくはこの本を以て戦前の日本経済学の達した頂点とする。

大塚史学の功績

——大塚久雄さんの方法論の批評をして下さい。

詳しいことはほんとうは知らないのだ。ことに大塚君の巨大なる文献的蓄積について、その宝庫の内に入って話をするような資格はぼくにはない。ただ大塚君がああいう学界の嵐に抗して、毅然として自己の学問に忠実に進んだガイストに深い敬意をもった。そして彼が、プロテスタンティッシュ・エチクの人であることの学問的意義を認めたいと思った。そして、この人の方法、この人の考え方がマックス・ウェーバー的であることにも興味をもった、さらにまたこの人の学問の地位がウェーバーに似ていることに一層の興味をもった。一九二一、二年ごろぼくはハイデルベルクにいた。そのときハイデルベルクにはリッケルトがいた。そしてウェーバーはすでに死んでいた。しかしハイデルベルクの世界ではウェーバーが神さまであった。その理由は自由主義のウェーバーの、社会科学の客観性論、価値判断自由論、イデアル・テュープス論などが、混とんたる政界の波に抗する彼の姿を浮彫りにしていたからである。それはマルクス主義と歴史派との間においてある特異な中立安全地帯を作り出そうとするドイツの学界の努力を代表するものであり、嵐の下における一種のアカデミズムであった。ぼくは当時レーデラーの下にあって、こ

の空氣を吸って、その時代的必然性を味わった。そのウェーバーが日本で、戦争の空氣、ファシズムによるマルクシズムの彈圧のもとにおいて、大塚君等によって複製されつつあることに興味をもったのである。もちろん条件がちがう時代がちがうから、それは明らかにすでにファシズムに対するレジスタンスであった。しかし大塚君が抽出したイデアル・テュープス自身が、歴史的に必然的なテュープスであったかどうかについては、ぼくに多少の疑問があった。しかし前にものべたようにそれを争う歴史的な知識はぼくには全くない。ただ、大塚君のこの努力が戦時を通じて偉大なメリットであったことは戦後において明らかとなった。いわゆる大塚史学のブームこれである。あのブームは一つには大塚君のすぐれた文献探究に対するアカデミックな敬慕と、一つには一種の少しばかり観念的な歴史観に対する青年の熱情の時代的な燃焼であったと思われるが、それもドイツにおけるウェーバー・ブームと同じ性質のものでなかったかと思う。ぼくには大塚史学とマルクス史学との間には多少の距離があると思われる。その距離をどうするか、これからの日本の経済史学界の問題である。

難波田君の『国家と経済』

——最後に難波田（春夫）氏の『国家と経済』について……。

難波田君も東大が生んだ秀才であった。マルクス主義の開花期において、自らを早くからその

批判者として作り上げた人であった。そしてとくにドイツのヒトラー御用哲学を十分に研究し、それを広範な経済学的知識と混ぜ合せて軍国日本の食糧にささげたのが、かの『国家と経済』であった。日本の軍部と官僚とは、その政治と行政の理念をヒトラー政府に求めていたが、彼らは無学であって、自らゲッベルス、ゲーリングたることができなかった。そこで求められたものは日本における彼らの経済学であったが、古い経済学者の某々はそれを志望してもお役には立たなかった。けだし彼らでは民衆のうちにある健全な思索力をだますには足らなかったからだ。このとき、そういう有効需要に対してともかくも一応のお役に立ったのが難波田君であったと思われる。この人の『国家と経済』が、戦時中経済学のベスト・セラーとなった。ああいう本は、戦後は忘れられるのが当然であり、忘れられて然るべきであろうが、それにしても、日本の戦争がどういう理念とどういふ科学とに基礎をもっていたかの歴史を知ろうとする人にとっては、文部省撰『国体の本義』とともに代表的な本である。

風雪で鍛えた知性

——要するに平賀肅学以後の東大経済学部には経済学がなかったと見ていいですか。

そうではない。それとは反対な勢もないではなかった。という意味は、こうだ。平賀肅学は一面東大軍国化の運動に対するレジスタンスであったが、他面それはマルクス主義の洗脳でもあっ

た。これは時代の要求と東大の地位との交錯であったが、結果からいえば、東大がこれを契機としてファッショ化したのであった。それゆえに、この肅学後、ここでも、本来の経済学らしい経済学が大体ほろびたのはやむを得なかった。しかしファシズムの下でもそこで石に伏し、齒をくいしばって自らの思想を守り、学問をした人がなかったとはいえない。またそういうことをさせる自由が、そこにまだどれほど残っていなかったとはいえない。ぼくが右の四つを学問上の業績としてあげたのは、実はその点を説明するためであった。ぼくはむしろこの四つを同一の価値においては見ない。ただ四つ並べて見て、そのうちに東大経済学部の自由の性質と伝統の価値とを見るべしというのだ。この四つにより、経済学の植民地にも民族資本の力が多少、残っていることがわかる。それをぼくはよろこぶのである。そこまでいえば、ぼくが、ぼくの祖国であり、君たち鈴木、武田両君の祖国であるわが東大帝国の愛国者であることを、君たちも、認めてくれるであろう。

——それは認めますよ。そういう見地で、当時の東大経済学部がいに自己批判すべきか、その点を、改めて先生にうかがっているのですよ。

それについて二ついうことがある。一つは河合君の最後だ。このごろ美濃部（亮吉）君が『文芸春秋』に日本思想受難史を書いているが、その資料とするために美濃部君から河合栄治郎君の批評を求められた。ぼくは、それを断った。というのは、この人は善悪両面においてやや巨大な

存在であった。少なくとも大望（野心といった方がいいかな）をいだいていた。そしてそのために実に危険な綱わたりをくり返していた。彼は批難さるべき多くの悪質をもっていたが、ほめられるべき長所をもっていないとはいえなかった。その悪質がその長所に酬いたのが彼の裁判事件であって、身から出たサビだという見方もありうるが、あの事件を一個独立の事件として考えれば、あんな無茶な事件はなかった。そこにファシズムの罪悪性・暴力が露骨に現われた。それはほんとに時代的な悲劇であった。そしてたたいも死なないと思われていた強健この上もないこの人が、あのように心身ともに疲れて死んだ。さみしくも悲しい運命であった。ぼくは、この事実を正視するにはたえなかった。これが時代であり、東大経済学部はこの嵐の眼であり、河合君はその瞳であった。もう一つは、この時代を文壇との比較をしてみるがよい。文壇でも昭和十七年以後はすべての文学者は「日本文学報国会」のもとに動員されて、芸術派たるとプロ派たると私小説派たるとを問わず、すべての文士はこのうちに入れられ、すべての文学は戦争文学となった。文士でこの組織に入ることを拒んだものは、中里介山、幸田露伴、宮本顯治（刑務所にあった）、宮本百合子だけであった。もっともそれにも及ばず執筆禁止であったものに谷崎、徳田、永井の三大家があった。こういう時代にあつては、作品について、多少のカムフラージュは止むを得ない。ただそのうちに、どれだけの進歩性をもっていたかが問題である。中日事変以降、文壇では火野葦平、島本健作、石川達三、阿部知二、伊藤整のような人がいい作品を残した。いずれもプロ作